

海援隊士

新宮馬之介

(1836~1886)



晩年の頃の馬之介

龍馬と親しく

「赤づら馬之介」のあだ名を持つ



海援隊(龍馬歴史館提供)

野市町新宮の農家、寺内信七の二男として生まれ馬之介からのちに寺内新左衛門と称し、雅号は小峰。維新後には鬼国山人ともいい、また新宮駒とも称しています。

河田小龍に入門し学問や絵画を学びます。海援隊きっての美男子で頭脳派。また、画術にも長けていたそうです。

仲間との出会い

嘉永6年(1853)、高知城下へ出て本丁筋2丁目の祖母の家に寄宿し、布屋という旅宿と家業の焼継屋を手伝うようになる一方で、河田小龍に入門して学問・絵画を学び、のちに小龍宅へ寄宿しています。小龍の塾には近藤長次郎など多くの仲間があり、塾生らは競い合うように成長していったそうです。また江戸での剣術修行から帰ってきていた坂本龍馬が小龍を訪れており、馬之介は龍馬とこの頃知り合ったのではないかとわれています。

決断の時

画家を志していた馬之介は、小龍から世界の大勢と日本の現状を聞くにつけ、考えは次第に変わっていききました。ついに憂国の思いと海への希望を捨てきれず、文久元年(1861)藩に「焼継修行」を願って出て江戸へ遊学。勝海舟の神戸海軍操練所に入り、海軍塾の塾頭龍馬のもと

で航海術を学んでいます。

文久3年(1863)土佐藩は武市平平太を投獄して土佐勤王党への弾圧をはじめ、10月には神戸海軍操練所に在籍する土佐の者に対して帰藩命令が下されます。馬之介や龍馬ら土佐出身者一同は話し合い、これを拒否して脱藩者として修行を続けることになりました。

馬之介は、名を変え土佐藩からの追っ手の目をくらし、海舟の家来になります。しかし元治元年(1864)10月海舟に江戸へ召喚命令が出されると、薩摩藩に保護されるようになり、その後亀山社中が結成されると龍馬に従い国事に奔走します。

歴史の大舞台に

坂本龍馬が中岡慎太郎らと共に薩長同盟締結に向けて活動を始めると、慶応2年(1866)1月17日龍馬と共に馬之介は、同盟が行われる京都の薩摩藩邸へ大阪から向かいます。新撰組などの警戒が厳しい中、大坂薩摩藩邸で薩摩藩士を証明する通行手形を交付してもらい、無事京都の薩摩藩邸に到着。21日に薩長同盟は結ばれ、馬之介は龍馬を守り側面から締結に貢献しました。

その後、龍馬ら同志と共に亀山社中、海援隊と行動を共にします。馬之助はこの頃に寺内信左衛門と名を変えています。

明治維新後の馬之介は、名を新宮

幕末の大きなうねり その一つは、このまちから

龍馬歴史館 水田耕二

幕末の英雄坂本龍馬は僅か33年の生涯のなかで、幾多の大事業を成し、数々の逸話を残し、新時代へ日本を導いた絶対的なキーパーソンといえるのですが、彼が現代の我々に残した最大の遺産は、実はその自由闊達な龍馬の生きざまそのものであると私たちは考えます。

そして、同時代を共に駆け抜けた幾多の志士たちも忘れてはなりません。

土佐勤王党は文久元年(1861)8月江戸の地で土佐藩拵げでの勤皇(政権を天皇とする)を目指し結成しました。武市瑞山が持ち帰ったその盟約書への、地元土佐血判第一号となった坂本龍馬は、これより歴史の表舞台に姿を見せ始めます。

盟約書の起草者である大石弥太郎は野市町の生まれ。勝海舟のもとで、洋学・航海術・砲術を学び、桂小五郎や高杉晋作らと親交を結びながら日夜回天の策を講じました。また、土佐藩参政吉田東洋を暗殺した安岡嘉助、大石団蔵。龍馬と行動を共にした海援隊士新宮馬之助。また土佐南学(動議実行)の精神や兵学などを中岡慎太郎以下、土佐勤王党参加の幾多の人材を薫陶した儒学者竹村東野も香南市の先覚者でした。

大石弥太郎が起想し、瑞山が形づくり、龍馬が描き切った幕末の大きなうねりの一つは、この香南市から発せられました。

乙女ねえやんの郷里 西川村と山北村

文責 野村土佐夫

ここ香南市に龍馬の姉、乙女はしばしば訪れていたという： 私たちのまちと乙女ねえやんのゆかりを探る。

龍馬の姉

坂本乙女

(1832~1879)



晩年の頃の乙女

香南市には以前から「夫の里である旧香我美町へ龍馬の姉・乙女が度々訪れていた」という伝え話があります。そして「龍馬伝」がテレビで放映されると、地元では一段とこの話が盛り上がりつつあるようです。

そこで、乙女姉やんの夫の郷里西川村と山北村を検策してみました。

駒と称し、龍馬の遺志を継いで北海道の開拓を志しますが、事業に失敗。その後、浦賀の海兵団などに従事して海軍大尉までの出世を遂げ、辞職後は妻の郷里である長崎で暮らしますが、流行病のコレラにかかり50歳で病没しました。

【※用語解説】

※焼継屋：茶わんや陶器などの破損修理をしたのが、焼継屋
※河田小龍：画家として有名だが、海外の知識に乏しい当時、極めて広い視野を持った知識人だった

野市町新宮公民館前にある新宮馬之介の生誕地



龍馬とのエピソード

■龍馬が自分の容貌について、美男で知られた馬之介に対し「君は男振りが好きだから女がほれる。僕は男振りが悪いがやっぱりほれる」と語っています。
■1865年9月9日付けで龍馬が姉の乙女と姪のおやべにあてた手紙の冒頭に「盛んなるハ二丁目赤づら馬之介」と書いており、あだ名で呼ぶほど仲が良かったと推測できます。

乙女姉やんの身辺については、娘菊栄の資料を網羅し信頼のおける武井優氏の「龍馬の姪・岡上菊栄の生涯」を参考にしました。
乙女の夫・岡上樹庵は、西川村の医師・藤田泰善と霜の末子で、天保10年23歳で岡上卓庵の娘・勢(13歳)の婿養子になります。19歳で亡くなり、母霜を高知へ呼びます。
乙女は、26歳で15歳上の樹庵の後妻となり、赦太郎と菊栄を産みます。樹庵没後の明治4年、霜は孫菊栄と婦喜(菊栄の義母)政江(義妹)を連れて山北村正光の藤田篤治(樹庵兄)の屋敷に移ります。

乙女と姑・霜とは犬猿の仲だったということですが、義理堅い乙女は、西川村と山北村の里方へ、何度か季節の挨拶に出向いていたとしても不思議ではありません。
今では、その樹庵の里・西川村に医師・藤田家の存在を知る人はいないようですが、さて？
この項を読まれ、風聞でもご存じの方があれば、「一報願います。」